

## 寺川央先生を送る言葉

その他のタイトル	Erinnerung und Dank an Prof. Dr. Nakaba Terakawa
著者	小川 悟, 渡辺 有而, 武市 修, 山取 清, 菅谷 泰行, 志田 章, 黒沢 宏和, 金子 哲太
雑誌名	独逸文学
巻	42
ページ	8-30
発行年	1998-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00018181">http://hdl.handle.net/10112/00018181</a>

## 寺川央さんのこと

小 川 悟

生きている人のことを書くということは、いささか難しい。誤解のないように言うておくが、これは決して寺川さんが死んでからなら書き易いと言っているのではない。本来なら遠慮なく書ける筈なのだが、いざとなると筆が進まないのである。何から書けばよいのか、難儀なこととは相なった。いや、それほど、この人については書き難いのである。円満な福相をしていて、怒った顔など全くといっていいほど見たことはない。小柄でコロコロした身体からは、学生時代にラグビーのような激しいスポーツをしていたことなど到底想像もつかない。ええ声の持ち主であるなど思っていると案の定、声楽の勉強などしているといった次第である。

研究室が、この人の生活の殆どを占めているようで、今日は部屋は閉まっているのかなあと思っていると、廊下の窓の隙間から明かりが見えて、話声が聞こえて来る。学生の往来は殆ど絶えたことはない。わたしたちの教室では一番学生の面倒見のよい先生である。多くの学生がこの人のお陰を蒙っている。わたしは寺川さんの講義を聞いたことはないのだが、おそらく大きく張り上げられたあの声は教室の隅々まで行き渡っていたのだろう。

寺川さんがわれわれのドイツ文学科に来られた時は、未だ明治生まれの教授たちが生きていた頃である。懐かしく、また難儀な思い出の一杯ある時代である。ドイツ文学科の創始者は今は亡き上道直夫教授である。変人ともいえる個性的な教授であった。関西大学人物百年史を参照頂きたい。詳細はそこに書いてある。上道教授は、東大出身の有名教授を呼ぶのが好きだった。われわれは、その昔、たとえば小牧健夫教授や石倉小三郎教授の講義を聞くことができたし、後には内山貞三郎教授に接することもできた。上道教授が、晩年高い評価を与えていた人物は、東大

から本学に来られた道家忠道教授であった。上道教授自身東大出身であったとはいえ、彼ほど東大を好きな人はいなかっただろう。彼は心から東大を愛していた。ただ、東大に対する想いは、ふだんは指の先ほども人前で出さなかった。むしろ、全く正反対のことばかりいつていた。福本教授が本学に招かれたのは、当時阪大教授であり、本学の客員教授であった渡辺格司教授の仲介によった。優れたドイツ語学の研究家であった福本教授は、上道教授とはまた違った意味で個性的であった。

あれはいつの頃であったか、70年代の初めだったか、教室会議の席上で福本教授が、一人の若い人を採用したいという発言があった。それが、京大の法学部の出身で、本学にいわゆる学士入学をし、福本教授の下でドイツ語学の研究に従事していた寺川さんであった。当時、福本教授はヴァイスゲルバーの研究をし、確か寺川さんもその影響を受けて同じような研究に従事していたのではないかと思う。翌年から、彼はわれわれの仲間になった。朗らかな性格の人で、われわれは満足していた。しかし、寺川さんは、本当のところはいろいろ苦勞をされたことと思う。寺川さんの苦勞を、われわれは詳しくは知らないが、寺川さんはいくところの苦勞人になってしまった。苦勞人だから、人の心もよく分かり人の世話も学生の世話もよくできたのだらうと、わたしは思っている。

柔らかな肌触りの人柄であったが、当時、学問的にはいささか堅かったのか、その影響は彼の作ったドイツ語の教科書に反映していた。あの頃は、統一教科書の統一試験であった。わたしは工学部のドイツ語を担当していたが、使った教科書が寺川さんの作ったものであった。言語に関する内容のもので、今は忘れてしまったが、何でもドイツ人学者の講演だったと記憶している。これが難しくて、下調べをしているうちにノイローゼになりそうであった。

この教科書には、理解できないところが多くて、何で俺はこんなにドイツ語ができないのだらうと、絶望的な気持ちにさせられたものである。これは、寺川さんの学問的性格の隠された一面の表れかも知れない。

寺川さんは、丹波篠山に住んでいる。篠山という風土は、彼によく合うことと思う。私もよく引っ越しをしたが、寺川さんも私に劣らず引っ越しをした。理想の家や土地があって、それを追い求めているかのよう

な感があった。もしそうであるならば、篠山は、おそらく彼の理想を実現した土地なのだろうか。何故なら、私も篠山が好きだからである。

寺川央さんの健勝を祈ってやまない。

## 大人 寺川央先生を送る

渡 辺 有 而

表題の「大人」は「たいじん」である。諸橋の大漢和辞典では、8項目に亘るこの語の説明の冒頭に『有徳者をいう』とあり、また「徳」の文字を分解して、意味範疇の記号として行為を表す「彳」と、発音の記号としての「恵」とから成る形声とする。但し形声には「声」の部分の意味を保って会意の特性をも備える場合があり、「恵」は『直視することによって他を圧服する精神の魔力の意とも、まっすぐな心の意ともいう』と記述している。1976年5月の日本独文学会における私の研究発表が契機となって知遇を得た故・紅露文平、寺川央の両先生を、人間味溢れるカリスマ的魅力と天然自然の男らしさの故に、私は原義通りの有徳者とお呼びしたい。

中国に陶器を輸出する豪商の長男として生まれた寺川先生は、恵まれた環境の中で多彩な才能を次々と開花させた。まず美食である。生家に寝起きする中国人たちのために本場から招いたコックの料理を、物心つかぬうちから味わった舌は、長じて美味しい店を探し出す特技に発展し、我々周囲の者は随分とそのお陰を被った。本物の美食家が育つのに3代かかるとは、よく言ったものである。味覚に次ぐグルメの必要条件は丈夫な胃と肝臓であるが、先生は60歳近い頃にステーキ・ハウスを4軒梯子されたというから（残念ながらそのときは同行の榮に浴さなかったが）、この点でも本物である。

次にスポーツにおいては、旧制中学時代に小太刀を学んで2段、高校・大学にかけてはラグビーに熱中して「豆戦車」の異名を取る名フオー

ドとして鳴らし、京大ラグビー部の黄金時代を築き上げた。だが或る試合で味方のパントを追って猛然とダッシュしたとき、ボールをキャッチした相手選手のキックが腹部を直撃して内臓破裂の重傷を負い、選手生命を全うできなかったことは、先生にとって痛恨の極みであっただろう。

なおこの傷には後日談がある。吹田第三中学の英語教師時代に摂津耶馬溪でキャンプした折り、生徒たちに絡んできた4人のやくざをスコップ片手に林の中へ連れ込み、『俺はここに傷がある』と一喝してすまじい傷痕を見せ、相手の度胆を抜いた。連中はすっかり先生に心服し、その夜先生のテントを表敬訪問して、他のキャンプ客たちからゆすり取った缶詰類を貢ぎ物に捧げたという。歴史と同じく人生にも「もし」は禁物だが、禁じられたもの特有の魅力に引かれて敢えて言えば、生徒からも保護者からも絶大な信頼と敬愛を受け若くして教頭を務めた寺川先生が、もし中学に留まっていれば吹田の市長か教育長ぐらいにはなられたであろうし、たまたもし機縁があれば度胸と人情と人を動かす良い意味での政治力とを兼ね備えた、清濁併せ呑む大親分が誕生したかもしれない。このような勝手な想像をさせてくれるところが、人間・寺川先生の稀に見る幅の広さと懐の深さである。

寺川先生の多様な才能と粹でくださったお人柄とを語るとき省くことのできないものに、声楽と花柳界体験がある。学生時代に本格的に修業されたテノールは優にプロ級で、ラグビー部の活動資金稼ぎに京都市内のホールでソロ・コンサートを開いたほどである。学校・PTA・地域社会・企業などのコーラスのリードテナーや指揮者として長く活動されたのもうなずける。2、3年前、高槻高岳館でのドイツ文学科恒例の卒論合宿の際に乾杯の歌、Ein Prosit!“を披露されたときは、少しの衰えも感じさせぬ張りのある美声が、3、4回生全員をフィーヴァーに巻き込み、歌好きの多い教員たちを驚かせた。授業でもしばしばドイツリートを歌われ、学生の学習意欲を高める上で多大な効果があった。たまたま我々二人の教室が隣合い、先生の朗々たる歌声が開いた窓を通して響いてきたときは、暫し授業を中断して学生たちと共に聞き入ったものである。

京大法学部時代、先生は弟さんと共に京都市内に下宿しておられたが、当時中学生だった私は偶然にもその下宿の前の道を通学路にしていた。

先生の言によれば、在学中ついに六法全書を買われなかったが、それほどに金と時間と情熱を注いだ対象は、スポーツ・音楽・読書と並んで紅灯の巷であった。周知の通り京都は東京や大阪とは異なり、伝統的に教授や学生を大事にする土地柄で、一見さんお断りの格式を誇る祇園の芸者屋が大学生は出世払いで遊ばせてくれるという風習が、当時まだ残っていた。冬の夕方、脂粉の香の漂う4畳半で障子を撫でる雪の音に耳を傾けた話など、その種の世界を全く知らぬ我々をも束の間の陶醉に誘う実感がこもっていたことを、今も覚えている。因みに卒業式当日に時計台の前で撮った写真を拝見すると、先生は招待した二人の若い芸者と一緒に満面に笑みを浮かべてカメラに収まっておられるが、手に持った卒業証書用の紙筒は実は空だったという。あろうことか授業料が遊興費に化けたためである。後日父君から厳しい説教と共に改めて授業料を出してもらい、一人遅れて証書を授与され、天衣無縫の学生生活にピリオドを打たれた。

卒業後は前述のように吹田の中学に勤務されたが、高校時代からの夢であったドイツ語学を学ぶべく、36歳にして天六の関大2部に学士入学された。教頭としての激務に、長いブランクのあるドイツ語の学習が加わり、睡眠3、4時間というハードな生活を2年続けた後、大学院入学と同時に中学を辞された。その頃の関大ドイツ文学科には、福本喜之助・上道直夫・内藤好文・斉藤清という錚々たる教授連が轡を並べていた。寺川先生が福本教授の指導を受けて、ヴァイスゲルバー・ブリックマンらの内容関係文法の研究に打ち込み、博士号を取得し、何冊かの著書・訳書を公刊して研究者として大を成され、また一方で懇切丁寧な指導によりあまたの弟子を育て、就職の世話をされたことは今更言うまでもない。私は上記4教授の時代の実態を直接には全く知らないが、その門下から国内はもとより国際的にも認められている幾人かの研究者が輩出した実績から推して、研究・教育の両面での4教授の偉大さが偲ばれる。これらの門下生たちが、大学院を修了して独立した後にますます仕事に磨きをかけ広範囲に活動してきたという事実は、在学中に学問の精神・方法と真理への愛とを己の血肉と化するまで師から吸収した証に他ならない。それらはテキストの翻訳や講義ノートの暗記などという技術的レ

ベルを遙かに超えた所にあり、優等生が研究者に脱皮できるか否かはここに懸かっている。およそ教員自身による高度且つ独創的な絶えざる研究無くして大学教育の質的向上など有り得ないことは、大学人たる者にとっては自明の理である。

本学のドイツ語学担当教員の中では私が先生に次ぐ年齢であったため、自然に先生を補佐する立場にあったこの16年間に、摩擦が全く無かったとは言えない。学生に対する指導と評価、とりわけ大学院入試の実施方法と合否判定をめぐる、しばしば我々の意見は対立した。先生の方針は時として、理よりも情が勝ち過ぎて甘えの風潮を生み、必ずしも学生の進歩を促すものではないと私には思われ、先生はそうした私の考え方を冷たく厳しすぎると見なされた。しかしそれがあくまで大学・教育・学問・人間についての見解と信念の相違によることをお互いが充分に認識していたため、感情的な対立に到ることは決してなかった。一つには先生が私を、融通が利かぬ8歳離れた弟のように扱って下さった度量と実力のお陰である。

寺川先生は、文学部長代理その他の要職を歴任して大学の運営に貢献され、学界では長期に亘って日本文体論学会理事・阪神ドイツ文学会幹事等を務め、社会活動としては吹田市教育委員長の重責を担われた。阪神大震災で宝塚のご自宅が被害を受けたのを機に、自然環境抜群の丹波篠山に新居を構えられたが、悠々自適の隠居生活に入るには大学にとって余りにも惜しい存在である。幸い非常勤講師として大学院に引き続き出講していただくことになり、ドイツ文学科一同、心から喜んでいる。今後とも先生がその学識とお人柄によって後進を導き、関大ドイツ文学科の、とりわけその卒業生たちのかつての輝きを取り戻すために、お力を貸して下さいよう願ってやまない。

最後になったが、今年の11月に関大出版会から先生の長年のご研究の成果として、本邦初の「リトアニア語文典」が刊行される。インド・ヨーロッパ語本来の姿を、音韻・形態・造語・統語のすべてにおいて最もよく現代に残しているこのバルト系言語の重要性は、表面的な言語研究・言語教育に与せず、言語を歴史的に掘り下げて考察し且つ教えることを使命とする者にとって、まことに計り知れないものがある。ドイツ

語学を専攻する本学の教員・卒業生・学生が一丸となって押し進め、今や他に比肩する大学無しとまで評されている言語史的研究と、それに基づく内容豊かなドイツ語教育とが、先生のこのご著書によって一段と充実することは疑う余地がない。何という貴重な、そして奥床しい置土産であろうか。ここに改めて大人・寺川央先生に対して、心からなる尊敬と感謝の意を表したい。

## 寺川先生を送るにあたって

武 市 修

寺川先生とお話させていただくようになったのは、私が本学のドイツ文学科の仲間に入れてもらってからですから、18年前のことになります。それ以来、学科の運営、特にドイツ語学教育の在り方等についていろいろお教えいただきながら、今日に至りましたが、振り返ってみれば、あつという間の18年であったような気がいたします。それはひとつには、若い時からラグビーで鍛えた体力・気力をもって先生がいつも若々しく活動しておられるお姿がほとんど変わっておられないことに原因があるのかも知れません。先生がもう70歳とは私ならずともどなたも信じられない思いがするでしょう。

寺川先生は多くの方がご存じのように、十数年の間中学校で教鞭をとられたあと学問に対する情熱止みがたく、改めてドイツ語学の道を志し、それを全うされた方です。先生は福本先生から受け継がれた関大独文の語学の水準を維持・向上すべくこれまで尽力してこられました。私たちににとっては非常に残念なことに定年という変えがたい定めのために、ここで私たち後輩に後事を託すことになったのです。

私が面識を得た時には先生はもうすでにドイツ語学者として優れた業績を重ねられ、関大独文に寺川ありと知られるようになっておられました。だから中学の先生としての寺川先生のお姿は知る由もありませんが、



しかし、学生に対する日頃の接し方を拝見していると、いかばかりすばらしい先生であったかが、目に浮かぶようです。

なぜこんな話を始めたのかと言うと、個人的なことで恐縮ですが、私も自分の中学生時代に、当時の貧しく苦しい生活環境の中で情熱と愛情をもって生徒たちを導くすばらしい先生に出会い大きな影響を受けた経験があるからです。寺川先生の学問的業績についての紹介は同じ分野の方々、教え子のみなさまにお任せして、私は先生の教育者としてのすばらしさを少しでもお伝えできればと思います。

一口に教師といっても、幼稚園から大学までさまざまな段階があり、その接する相手が年齢的にも肉体的・精神的にも異なることから、接し方、あるいは活動の内容が違ってきます。しかし少なくともそこに共通するのは、いわゆる利益共同体 (Gesellschaft) における付き合いとは違い、物質的利益とはまったく無縁の、純粹に人間的な関係が可能であるということでしょう。それだけに教師はやりがいのあるいわゆる天職と言えますが、反面、相手に与える影響は良きにつけ悪しきにつけ大きいので、それだけ恐ろしい仕事でもあります。

寺川先生はきっと生徒たちにとってかけがえのない人であり、先生御自身も教師としての天職に燃えていらっしゃったのだと思います。勝手な憶測をお許しただければ、道半ばにして方向転換されるには随分とお悩みになったことと拝察いたします。そのお気持ちからでしょう、かつての教え子たちに慕われ続けた先生は、研究者の道にお進みになったあとも、いろいろな形でお付き合いを続けてこられたと伺っております。ドイツ文学科内はもちろんのこと、文学部・大学での重要な役職を務められる一方、吹田市の教育委員会の委員、さらには委員長まで引き受けられて、教育界のために力を惜しまず、尽くしてこられたのです。

もちろん大学における教育研究活動がそのために疎かになることは毫もありませんでした。私が常々感服するのは先生の学生たちに対する心のこもった対応です。一身上の問題から就職の世話、さらには、卒業後のさまざまな相談まで、先生を慕ってくる学生・卒業生はあとを断ちません。また、大学院を修了して教壇に初めて立つ人には必ず授業を参観し、教師としての初体験の中でその人に的確なアドバイスをされるとい

うことを伺って私は感激しました。先生は天性の教育者であり、中学から大学までまさに天職を全うしてこられたのです。

自己評価・自己点検の必要性から研究活動の活性化が求められる一方、近い将来に大学全入の時代を迎えるだろうと言われる状況の中で、大学人にとって学生の教育の充実もまた、ますます大きな課題となっています。そのような時に最適任の先生が去られることになり、そのあとを思うと、浅学非才な私などは心許ないかぎりですが、寺川先生の残された有形無形のお教えを守り、他の先生方と協力して何とか微力を尽くさねばと、心引き締まる思いがしております。学生・卒業生ばかりでなく私たち後輩にも今後ともいろいろとお知恵をお貸しくださいますようお願いいたします。先生のますますの御健勝をお祈りしつつ、最後に心より感謝の気持ちを表わして私の惜別のことばを閉じたいと思います。寺川先生、長い間本当にありがとうございました。

## 寺川先生との出会い

山 取 清

もう20年以上も前のことになるが、私が最初に寺川先生にお会いしたのは、関大に入学して独文科の先生方の紹介があったときである。そもそも中学や高校の時のガイダンスはまったく記憶に残っていないのであるが、この時の様子だけはなぜか今でもはっきりと覚えている。たしか寺川先生は一番最後に挨拶されたように思うが、あの明るく温厚な印象は今と少しも変わらない。

私はあの落語家の桂文珍さんと同じ丹波の篠山の出身で、大学に入った4月から吹田に下宿するようになっていた。こんな話しをしても信じてもらえないかもしれないが、高校時代まで私はひとりで郷里を出た経験が1度もなかった。要するに、まったくの田舎育ちの世間知らずであった。受験の時は高槻に住んでいた叔父の家に世話になり、下見にも連

れて行ってもらったが、それでも阪急電車の乗り換えが分からないものだから、心配した叔父が当日は始発駅の北千里まで車で送ってくれた。試験の内容はまったく忘れたが、第1グラウンドの周囲を埋め尽くした人の数の多さにすっかり圧倒されてしまっていたことだけは確かである。とにかく受験を済まし、高槻までたどり着いたのはよかったが、どうやら反対の出口に出てしまったらしく、あるはずのバス停が見つからない。そうとは気づかず半時間も駅の周辺をうろうろしたあげく、人にたずねてようやくバス乗り場が分かり、バスに乗ってほっとしたせいも、今度は降りるべき停留所を飛ばしてしまったのである。発車してすぐに気づいたので運転手に申し出たが、停留所のすぐそばの信号で止まっているのに降ろしてくれなかった。しかたなく次の停留所で降りて、もうすっかり暗くなった道を叔父の家まで歩いて帰った。今考えればそんなところで降ろせと言う方がおかしいのだが、のどかな田園風景の中を走る篠山線でのんびりと通学していたことが念頭にあったので、何だか情けなくなって無性に腹がたった。

こんな調子だから受かるわけなどないとほとんど諦めていたが、結果的には関大だけから合格通知をもらった。それでも今から振り返れば、これが私の人生の転機であった。第1志望の学科ではなかったが、そんなことよりただ合格できたことがうれしかった。しかし、それよりも親の家を離れ、住み慣れた郷里を後にすることの不安の方がさらに大きかった。受験のおりの苦い経験ですっかり都会不信になっていたからである。そんな私の不安感と緊張が最初に緩んだのが、ガイダンスで寺川先生のさわやかな笑顔と親しみのある話しぶりに接した時であった。

自分から言うのも変であるが、それからの私は高校時代までとはすっかり別人になった。それまでの私は学校を休んだことこそほとんどなかったが、授業中はただ眼を開けているというだけで、頭の方はほとんど眠っているのも同然という状態であった。そんな私が大学に入ってから授業を受けるのが楽しくなったのである。田舎から出てきて適度に刺激されたのが幸いしたのかもしれないが、最大の理由はドイツ語がすっかり好きになったからである。なかでも寺川先生が授業で紹介して下さったドイツ語の詩と歌は一番のきっかけであったと思う。先生が教室で

自ら歌って下さった「美しい五月に」の詩とメロディーは自然に覚えてしまっていた。私はそれまでの外国語嫌いを完全に忘れてしまい、ドイツ語の文法を覚えることにも授業の予習をすることにも何の苦痛も感じなくなっていた。下宿先の同僚は大学へ来て本気で勉強を始めたという私の話しを聞いて不思議そうな顔をしていたものである。そして気がつくともうドイツ語から離れられなくなっていた。

そんな私が寺川先生に個人的に指導していただくようになったのは学部の3回生の終わり頃からである。私は卒論では語学を扱おうと決めていたので、寺川先生のドイツ語学概論の授業が終わってから教室で先生に相談したのだった。梅田の本屋でライズィーの『意味と構造』の翻訳を偶然に見つけて内容に興味をもったことから、先生にドイツ語と日本語の比較のようなことをやりたいと告げると、すぐに日独対照研究会を紹介して下さい。春休みに先生の紹介状を持って当時まだ谷町にあった大阪外大へ行くと、研究会には10名ほどの先生方が出席されており、その日は小さな教室に集まって全員が順に発表された。そんな小さな集まりとはまったく知らずに出かけたせいか、緊張のあまり夕方まで席を立つこともできずにじっと発表を聞いていた。もちろん当時の私には内容は十分に理解できなかったが、隣に座っておられた大阪市大の浜崎先生が資料のそばに岩波新書を1冊置いておられるのに気づいたので、そのタイトルをメモしておいて、研究会が終わってからさっそく本屋に立ち寄って1冊買い求めた。それは鈴木孝夫氏の『ことばと文化』であるが、一般言語学の問題を分かりやすく解説した内容がとても面白く、しかも、例のライズィーの訳者が同じ鈴木氏であることもその時に初めて気がつき、何だかすごうれしかった。ことばについて深く考えるようになったのはその時からである。新年度になってから卒論のご指導をお願いする時に、そのことを改めて報告すると、寺川先生は「いい経験をしてきたな」とおっしゃって、今度はポルツィヒのものを読むように薦めて下さったのである。それから大学院を経て現在に至るまで、このやりとりは変わっていない。つまり、先生はご自分の考えを押しつけるようなことは決してなさらない。いつもヒントになるような仕方でも助言して下さい、こちらがそこから何かを見つけ出すのをじっと待っていて下

さる。その時以来、私にとってはとにかく寺川先生に話しを聞いていただくことが次の糸口に結びつくようになったのである。

ところで、大学院時代にも忘れられない思い出がたくさんあるが、なかでも摂津峡での研究会はもっとも印象に残っている。この研究会には亡くなられた斉藤先生もいつも参加して下さっていた。高槻の駅前に集合してバスで終点まで行き、しばらく歩くと初夏には蛍が舞う溪流があって、川沿いの道の途中にある小さな休憩所が研究会の場である。年に3回ほどのペースでハイキングと親睦を兼ねて研究会を開くのであるが、発表が終わるといつもすき焼きを囲み、景色を楽しみながらの歓談になる。いつだったか年の暮れに開いた時に、少し冷え込んできたなと思いつつ外を見ると、溪流に雪が降り始めていて、一同で眺めているうちにみるみる積もって白い雪景色になった。田舎では見慣れているはずであったが、なぜかその時は格別に美しく風情があるように感じられた。それにしてもほのぼのとしたあの温かみのある研究会の雰囲気は寺川先生のお人柄によるものであった。おそらく誰もがそう感じていたにちがいない。

## 最後のドイツ語教師

菅谷泰行

寺川先生が本年3月末日を以て、めでたく定年を迎えられると聞く。まずは長年ご指導ご鞭撻を賜ってきたことに心からの謝意を表したいと思う。

私が寺川先生に初めてお目にかかったのは、関西大学に入学して間もない頃であったが、講義を受けるようになったのは、大学院に進学してからであった。だから、先生の思い出は私の大学院の思い出と結びついている。大学院生は気楽なもので、好きな勉強を思い切りしていれば、それで誰に文句を言われることもないが、反面、就職できるか否かが決

まる瀬戸際の時期でもあるから、それはそれで人に言えない苦労がある。寺川先生はそんな院生の悩みを理解し、親身になって相談に乗ってくださる数少ない教授のお一人であった。だから、先生を慕って大学院に進学してくる学生は少なくなかったし、きっと今もそうなのだろうと思う。

大学院生時代はアマチュアの域を出て、これからやっとセミプロにでもなろうとする段階であるから、本当のプロが見ると、まだあれこれとあらが目につく。だから、先生にはずいぶん叱られた。しかし、どんなに叱られても、それが尾を引くことはなかった。寺川先生のお説教は不思議と素直に聞けたし、素直に聞けたから、反省もし、また反省することで、成長もした。寺川先生には学問的なことを教わったのはもちろんだが、それだけではなく、人間として生きていくための基本的なマナーやルールを多く学んだような気がする。それらは現在の私の大切な精神的財産となっている。

寺川先生にはずいぶん怒られたが、逆に褒められた記憶もある。いちばんうれしかったのは、「授業参観」のときだった。寺川先生は教え子が最初に教壇に立つ年には、必ずその授業を参観し、問題点がないかチェックし、もし問題点があれば、それをどのように改善すべきか、細かくアドバイスされておられたのである。私も博士課程後期課程に進学後、非常勤の職を得て、初めて教壇に立った。教えるのが夢だっただけに、教育への思い入れも強かった。まず時間をかけてノートを作った。教室で配るためのたくさんの資料も作った。どう教えたら分かってもらえるのか、授業で説明すべき内容を何度も繰り返して頭の中で言ってもみた。それが済むと、どう書けば分かってもらえるのか、白い紙を黒板に見立てて、何度も書いた。本当に教え始めた頃は、こんな調子で1日があっという間に過ぎていった。

しかし、自分で勝手に造り上げた、相手を持たぬ仮想授業は、しょせん絵に描いた餅にすぎず、私はすぐに壁におち当たった。期待するようには学生たちに理解してもらえないのだ。出口が見えないまま、数ヶ月が過ぎたある日のこと、ふとしたきっかけで、寺川先生から教授法や教師としての経験談をお聞きする機会を得た。それは私にとって大きなヒントとなった。さっそく自宅にもどった私は授業用のカード作りに取り

かかった。「寺川式」格変化表、ミニ百科、文法コラム、ジョーク集など、学生目をドイツ語に向けさせるためのカードが日を追ってたまっていった。そのころ夢中で作ったカードは1000枚近くになったが、次第に要らなくなったものも多く、今手元にはそのうちの500枚ほどが残っている。これらのカードは、苦しかった院生時代の記憶を私の中に蘇らせる「生証人」であると同時に、教師としての今の私を支えてくれている基盤でもある。

さて、参観の日、寺川先生に見ていただくことにしたのは工学専攻の再履修クラスで、300人は収容できようかという大教室に学生数はわずか50名ほどであった。しかし、そのころ私の熱意が伝わったのか、学生たちは自発的に前の席に座り、拙い私の説明にも熱心に耳を傾けるようになってくれていた。寺川先生は、授業が開始して数分後に教室に入っただけで、そんな学生たちから2列ほど後ろの席に座られた。私は一瞬緊張したが、あがってしまうこともなく、準備してきたカードをめくりながら、無事に予定の範囲を終えた。授業が終了してすぐに先生のところに歩み寄って、参観のお礼を述べると、先生は「驚いたよ。ゆっくりだったけど、聞いていて、分かりやすかったよ。学生の9割はつかんでいたね。私が参観してきたなかでは、君がぴか一かもしれないね」と、思いがけないお褒めの言葉を頂戴した。それはお世辞だったかもしれないけれど、私はうれしかった。今でも私は教育では誰にも負けるものかという心意気で授業に臨んでいる。そんな私が自分の授業にほんの少しでも自信が持てるようになったのは、こんな出来事があったからで、寺川先生には今も心から感謝している。

さて、思い出のページをめくっているうちに、いつの間にか与えられた枚数に近づいてきたようだ。いつだったか、寺川先生は、硬骨の士であるとともに、人情味溢れる温かい心も持ち合わせておられた故・斎藤清先生を称して、「斎藤先生こそは最後のドイツ語教師ですよ」と言われたことがある。しかし寺川先生にとって、斎藤先生がそうであったように、私にとっては、寺川先生が最後のすばらしきドイツ語教師であるように思える。そして、先生の教え子の一人として、私もこのドイツ語教師なる存在にとことんこだわり抜いて、これからも生きていこうと思う。

寺川央先生、本当にお疲れさまでした。そして、有り難うございました。

## 寺川先生との出会い

志 田 章

私は本棚からきちんと製本された1冊の薄い本を取り出す。濃い緑色をした表紙の上部には大きめの活字で Das Wunder der Sprache と書かれている。表紙を開けると、黒いはっきりした活字でページが埋められている。抜粋で16ページある。所々に書き込みがされている。もちろん私が書いたものである。その中には、日頃の授業で私が使わせていただいているものがいくつかある。「前置詞 in の訳し方には四つあり……。コロンは、〈すなわち〉と訳すとうまくいく……。引用符はキューキューロクロク (9966) ……」。

寺川先生は教材に W. ポルツィッヒの『言葉の不思議』を選んでおられた。十数年前のことである。A大学で行われたドイツ語の講習会にはかなりの数の学生達が集まっていた。夏ということもあって、先生は軽装で教壇に立ち、初日は先生が自ら日本語に訳された。翌日からは受講生が訳すことになっていた。あらかじめ先生は次回までの範囲を指摘されていたので、私は分からないながらも、その範囲だけは辞書を入念に引いたつもりでいた。さて、自分の訳す順番になったとき、予習していても分からない箇所に行き当たってしまった。暫く無言の時間が過ぎ、分からなかったとありのままに言うことができず、気づいた時には予習の時に考えていた、おおよその訳をできてしまっていた。私はしまったと思い、先生の方をちらと窺ったが、先生はなごやかな表情のまま、「それでいいですね」と言われ私が訳した部分を改めて訳し始められたので、その訳を耳をそばだてて聞いた。すると先生はいともたやすくその一文を、一語一語をおろそかにすることなく訳されたのだった。私



は、自分がノートに書いておいた個々の単語の意味と先生の訳された単語の意味を比べてみて、あまり違いのないことに気づいた。一語一語誤魔化さずに訳すべきだった、とその後悔したと同時に、なぜ先生が訳されると、前後の意味の通じるすっきりとした文意になり、自分で訳すと意味の繋がらない文になってしまうのだろうと不思議な気持ちになったのだった。

数年後、再び先生の講義を受ける機会に恵まれた。寺川先生は私が先生の授業を受けていることを大学の出席カードから知られたのだろうか。私は、講習会では多数の学生が出席していたし、あれから何年か経っているので、私のことなど覚えているはずもないと思っていた。しかし予想に反して、先生は私を見てとても驚いた様子をされた後、当時の講習会でのことを話され、「よく来てくれました」と感激した口調でおっしゃった。私は先生の前に立ったまま、よろしく願いますと頭を少し下げるのが精一杯だった。ほとんど直接話したこともない者に、このような歓迎の言葉をかけていただくとは、私には夢にも思わなかったのである。この時私は先生の細やかなお心に触れ、嬉しさと胸が一瞬になったことを、今も鮮やかに思い出すことができる。

私はそれ以後もご迷惑など考えもせず、先生のお言葉に甘えながら先生の授業に出席し、正しく公私共にお世話になった。大学院入学後の或る日先生は私を、当時はまだ関西大学2部があった天神橋筋六丁目にお呼びになった。大阪の下町の雰囲気そのまま残している阪急の天六で待ち合わせをし、先生は2部での思い出を色々話されながら、天六の商店街を暫く歩いた後、狭い小路に入られて、かなり古いガラス戸数枚が並ぶ家の前で立ち止まれ、そのガラス戸の一つをがらがらと開けて中に入られた。私も後に続くと、「いらっしゃい」という威勢のいい声が出た。「ここの寿司屋には2部の授業の終わった後何回か来ました。先日は家族でこの商店街を歩いたんです。その時もここに寄ったんですよ。子供に昔ながらの大阪の町の良さを知ってもらいたくてね」。確か先生はこのようにことをおっしゃったと記憶している。先生はたくさん注文してくださり、私はすっかり御馳走になってしまった。先生はまた教育についてもよく話され、私は様々な教訓をいただいた。「教育をドイツ語でど

ういか知っていますか。エァツィーウングというんですよ。ツィーエンとは引き出すことを意味しているんです。人にはその人の良いところが必ずあるんです。それを引き出すのが教育なんです」。

後期の最後の授業で先生はドイツ語でリートを歌ってくださった。その時私はほんとうに驚いてしまった。クラスにはわずかな学生しかいなかったが、先生は以前オペラを歌われていたという澄んだ美しい声を響かせ、心をこめて歌ってくださったからだ。今思うと、私は先生のこの教育に向けるひたむきな情熱に、また寛大なお心にどれだけ助けられ勇気づけられたことだろうか。私は先生との出会いに心から感謝している。これからも寺川先生に御教授いただいた様々な教を胸に、教育と研究に励んでいきたいと思う。

## 恩師の思い出

黒 沢 宏 和

私が初めて寺川先生にお目にかかったのは、3回生の4月「ドイツ語学概論」の最初の講義のときでした。当時、今で言う「シラバス」などほとんど目にせず講義に臨んでいた私は、何先生がこの科目を担当されるのかさえ知らず、幾分緊張した面持ちで担当の先生が来られるのを待っていました。やがて沢山の配付資料の入った白い手提げ鞆を手に、ほぼチャイムと同時に颯爽と教室へ入って来られた先生のお姿は、私にはとてもセンセーショナルで、今でもよく覚えております。

先ず先生は、透き通るような張りのあるお声で、概ね次のようなことをおっしゃいました。私の脳裏には、その時に先生が話された内容がはっきりと刻み込まれています。

「…勉強したいと思ったら、そのときは一生懸命やりなさい。勉強するのに、年齢的に遅いということは決してない。ドイツ語は、やればや

っただけ力がついてくる。もし、この中にドイツ語を一生懸命勉強したいという人がいれば、『ドイツ語中級問題100選』（郁文堂）という問題集を買って、10題ずつ解いて私のところまで持ってきて下さい。添削をしてあげます。」

とても還暦を迎えられたとは思えない、若々しい態度で、淡々とこれまでの先生ご自身の境遇を語られる姿に、これまで習った先生とは一種異なった魅力を感じ、これからこの先生に教えて頂けるという幸運に感謝しました。そして、予備校の英語教師になるという夢はきっぱりと捨て、先生のような学生に感動を与えることのできるドイツ語教師になりたい、という新たな希望が芽生え始めたのもこのときでした。その講義が終わると、その足で正門前の書店へ行き、『中級問題100選』を買い求めました。

当時、少林寺拳法部の主将を務めていた私は、運動の方が忙しく、勉学まで手が廻りませんでした。先生が熱心に添削して下さったお陰で、しだいしだいにドイツ語に興味をわき、とうとう『中級問題100選』をすべて終え、『続・ドイツ語中級問題100選』を解くようになっていました。

3回生もそろそろ終えようかという頃、先生の研究室を訪れた折、先生は私に次のように尋ねられました。

「将来はどうしますか？」

当時の私の学力では、大学院進学など夢のまた夢でしたが、恐る恐るできれば大学院へ進みたい、と胸中を先生に打ち明けました。昨今の就職難からは想像もつかないほどの売手市場であった当時、私は先生が大学院進学など諦めて、良い就職口を探しなさい、と言われると思いました。ところが先生はにっこりとされ、「今はドイツ語の力をうんと磨くこと。ドイツ語や英語の他に、日本語の本を沢山読んでおくこと」とおっしゃいました。もし、このとき先生が大学院進学は諦めなさい、と言われるのなら、今の私はなかったでしょう。

4回生になると、『卒業演習』で先生の御指導を賜りました。そのときの卒演のメンバーは私を含め、4名でした。水曜日の3限目そのメンバーが先生の研究室に集まります。先生は、毎回論文に関する基本的な心構え、全般的な諸注意をお与え下さった後、各人に添削した原稿をお返

しになりました。つまり、毎回各人がその卒論のテーマに応じて与えられたテキストの訳文を400字詰め原稿用紙に書いて提出するのが義務づけられていたのです。先生は、ゼミの学生が毎回提出するこの原稿を、必ず翌週のゼミまでに懇切丁寧に添削されました。ゼミ生4人が異なったテキストを読んでいたのですから、先生の御苦勞は相当なものであったろうと、推察されます。私とそのゼミで初めて読んだのは Wilhelm Schmidt の *Grundfragen der deutschen Grammatik* (Berlin 1967) の Modus の箇所でした。当時の私のドイツ語の力では、相当難しく、拙い日本語にしかできませんでしたが、毎週それこそ真っ赤になって返ってくる原稿が楽しみで、気がつけば訳文を書いた原稿は、優に100枚を超えていました。今思えば、ドイツ語を日本語に訳すというこの単純な作業を通じて、ドイツ語の学力のみならず、抽象的な概念をなるべく分かりやすい日本語にするという、日本語の表現力の訓練ができたのではないかと思います。

大学院へ進んでからは、指導教授として「ドイツ語学演習」や修士論文の指導などで、先生の研究室で文字どおりマン・ツー・マンの御指導を賜りました。講義中、先生はよく「難しい文章というのは、それを書かれたドイツの偉い学者も相当文章を練って、言葉を選んで書いているのだから、こちらもよく考えなければいけない。従って、速く読めるようになることも勿論大事だが、時間をかけてじっくり考えながら読むこともまた大事である」とおっしゃいました。博士課程2年のとき、先生のご専門である Leo Weisgerber の *Die Sprache unter den Kräften des menschlichen Daseins* (Düsseldorf 1949) を講義で読んでいたときのことです。私が前夜徹夜で考えた訳文を読み上げると、「そういう解釈もできるね」とおっしゃり、400字詰め原稿用紙に清書された先生ご自身の原稿に朱を入れられました。そして「文章というものは、練れば練るだけ良くなる」とご自身に言い聞かせるようにおっしゃっていたのがとても印象的でした。このとき、私は先生の学問に対する厳しさを知り、身の引き締まる思いがしました。

首尾よく就職が決まった後でも、先生が常任理事を務めていらっしゃる日本文体論学会で私が発表したとき、司会の勞をお執り下さいました。

さらに、阪神大震災後、まだ混乱の醒め遣らぬ中、私共夫婦の媒酌の労をお執り頂いたことは、一生の記念となりました。

また、一昨年には先生の長年に亘るドイツ語教育のエッセンスを凝縮したテキスト『ドイツ文法を解く鍵』（第三書房）の共著者にご指名頂き、身に余る光栄に浴しました。

このように、寺川先生の御指導・御支援なくしては、現在の私は考えられません。先生のこれまでの御恩に、この場をお借りして篤く御礼申し上げます。

「教育と研究とは表裏一体の関係にある。だから一生懸命教えなさい。そして学生の素朴な疑問に耳を傾けなさい。そうすれば自ずと研究テーマは見つかるはずだ。なぜなら教室の中にこそ、論文の材料が眠っているのだから。」

これは先生がよく口にされたお言葉です。このお言葉を真摯に受け止め、先生の御恩に少しでも報いるべく、そして教師としてだけでなく、人間としても偉大な先生に一步でも近づけるよう、教育・研究に全力を尽くす所存です。

## 恩師 寺川先生

金子哲太

寺川先生、長いあいだ本当にご苦労さまでした。

思えば先生との初めての出会いは、本学大学院の後期課程の面接試験時に遡ります。大学院学舎1階の奥の、薄暗く狭い教室で、確か6～7人の独文科の先生方を前にして緊張の極致に達していた私には、寺川先生はもとより、どの先生が語学の先生か確認する余裕すらありませんでした。何人かの先生方から、これからの研究方針についての質問や筆記試験に対する厳しい批評を受け意気消沈していたところ、温厚な口調で、質問というよりも語りかけるような調子で問いかけられた一人の先生が

おられました。そちらの方へ目を向けると、小柄ながらがっちりとした体つきのその先生はスポーツ選手のそれに似た血色の良いお顔をなさっており、ブラックメタリックの渋く輝く眼鏡の奥には、多読による疲れのせいかな閉じ気味で、一見柔和な感じには見えつつも、事の本質を悉く見抜いてしまう、毅然とした研究者の鋭い目が覗いておりました。私は、表面には穏やかで、和やかな雰囲気醸しだしておられる一方、そのような厳しさの滲み出た先生の視線によって、自分の無学・浅薄がとうに見抜かれていたのを感じつつも、何かしら幾分落ちついた心持ちになっておりました。つまりそのにこやかな笑顔と物腰ゆえ、「大丈夫だよ、君。なあに合格するよ」と言い渡されたような安心感さえ生じ、俄かに心臓の鼓動が静まっていったのを記憶しています。しかし先生の優しい口調に反比例して、質問内容は私にとって非常に厳しいものでした。筆記試験用に、語学用語を入試の暗記物ぐらいにしか捉えていなかった私に喝を入れて下さったのです。

「君の答案見たよ。よう頑張って書いてあったな。」(一瞬ホッとした)

「だけどな金子君、ただの語句説明のような気がするなあ。」(……)

「物事は何でもそんなやけど、辞書に書いてあるような説明だけだと誰が読んでも表面的にしか分かんのであって、読み手に対して不親切だし、説得力に欠けるんじゃないかな。やっぱりその背後に流れている動向、つまり経緯のようなものを踏まえておかないとあかんし、議論もたくさんあったろうし、それにメリット、デメリットもハッキリさせておかんとかあんのじゃないかな……」(言葉がなかった)

「……だけどこれから期待してるよ。」(はいっ、頑張ります)

通時的研究を志していた私に対して、先生はズバリ根本的なところで、私のフィロロギーに対する取り組み方と研究姿勢の甘さ・粗雑さを暗に指摘され、論じて下さっていたのでした(このことは、後になってようやく認識しました)。その間先生の表情といえば、終始一貫して変わらぬその温和な笑顔でした。

こうして寺川先生は指導教官として、右も左も分からない私をしかるべき方向へじっくりと丁寧に導いて下さいました。授業のため先生の研究室へ伺うと、「調子はどうや、最近は、何や知らん忙しいな」で始まり、

「色々としんどいけど踏ん張らなあかん。体気いつけや」といったやはり柔らかい調子で挨拶をして下さりつつ、研究室のドアを閉めるのが常でした。しかしこちらの予習不足、訳はしどろもどろ、といった状況で遅々として授業が進まなかった後はいつも、先生のそのような優しいお言葉が私には心苦しく思われ、その度に身も心もうなだれて研究室を去ったものでした。また「これ持って行きや、僕が食べるとあかんから」とお菓子やパンを持たせて頂くたびに、そのお言葉がつい先生の穂のようなお腹へと私の目を遣らしめた。という記憶を思い起こしてみると、やはり授業に身が入っていなかったと言え、今でも反省の念に耐えませんが、とはいえお会いする度にかけてくださった柔らかなフレーズはいつも、一向にドイツ語の能力が上達しない私の身に沁み、励みとなり、次へのステップの為の糧となりました。

授業では、ドイツ語を訳出する際は滑らかな日本語を心掛けること、そしてそもそも Fremdsprache としてドイツ語を学ぶ我々日本人は単語一つ一つに敏感になること、に重点が置かれていました。基本的な語法に関しては例えば、前置詞 an は密着のイメージで殆ど事足りる、中性名詞の複数形は具体的に訳すとしっくりくる、等から始まって、Ding と Sache の語源的な違い、そしてドイツ人にとっての wirklich と real の感じ方の違い等、多岐に亘って、様々なレベルから一つ一つの語に対する詳細な説明をして下さいました。一語一句おろそかに出来ないという姿勢は今でも心の中に刻まれ、なかなか実行できてはいませんが、教壇に立つ今も常に心掛けるようにしております。

またテキストは Brinkmann, Porzig 等の論文を扱い、言語内容研究の流れを汲むものを精読する訓練が中心に授業が進められ、個々の用語からして難解でしたが、当時のドイツ内外における言語学界の傾向や論争などを十分に混じえ、著者がいかなる意図で書いたかを、その都度詳細に敷衍して説明して下さいました。Energeia としての言語を内的言語形式の中で捉えた W. v. Humbolt の理論を基礎にし、更に独自に発展させた、L. Weisgerber の精神面を強調した動的言語観、例えば Zwischenwelt, Weltbild 等について語られる先生の目はいつも輝きに満ち、心の奥底にある魂が自ずと言葉を発しているかのように映ることさ

えありました。講義ノートには乱雑なメモが残るだけで、後で整理するのが大変でした。Weisgerber 教授と福本喜之助教授に師事され、言語内容研究一筋に打ち込んでこられた先生の深く揺るぎない精神は、重厚でしかも決して気取ることのないその風格に表れているのだと、断言できます。

先生はまた、少年時代から既に哲学書を愛読され、学生時代にはひたすらラグビーや声楽に熱中され、長い間中学校の教諭として教育に心血を注いで取り組まれました。また本学の多忙な職務の傍ら吹田市教育委員長・副委員長を計4年間務められ、市教育界に多大な貢献をされました。このように万事に粉骨砕身して打ち込まれてきた積み重ねもまた、先生のお人柄そのものに映し出されていると思われます。

この他、先生ご自身に関するエピソードには枚挙に暇がありませんが、今もなお青春時代であり続けているような先生の、ことに対する一つ一つの真摯な姿勢・篤行は決して忘れません。寺川先生、永年に亘り常に周囲への気配りをされ、全力疾走し続けてこられました。これからは時間的な余裕をお持ちになることと思います。お身体に十分お気をつけられ、ご自分のお仕事に専念なさってください。一層のご清栄を心からお祈り致します。